

# 土地

パクキョリ

朴景利

4

安字植 訳

福武書店

# 土地

ハタケキョリ

朴景利 4

安字植訳

福武書店

# 土地

④

一九八三年七月二五日 第一印刷  
一九八三年七月三〇日 第一刷発行  
定價 一一〇〇円

著者 朴景利

訳者 安宇植

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麴町六十六 一〇二

電話(三三)三三〇一一三三

振替口座(東京)六一〇五〇九七

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© PARK KYUNG RI 1983

シリーズ・タイトル ISBN4-8388-2041-8

土地2002 ISBN4-8388-2068-X00093

落し本はお取替を致しませ

土地 4 — 目次

第二篇 追跡と陰謀〈承前〉

13章 夢

8

14章 追跡

28

15章 無明煩惱

47

16章 山立小屋で

64

17章 風だろうか

82

18章 類は類を以て集まる

98

19章 白菜畑の風景

120

20章 片割れ月

21章 雲峰の名人たち

22章 白衣の人びとの儀式

第三篇 終末と発芽

1章 ちっばけな椿事

2章 老保守派と老開化派

144

165

186

208

230

装丁 菊地信義  
カバー絵提供 韓国文化院

# 土地

4



第二篇 追跡と陰謀（承前）

## 13章 夢

「どちらへ参られました」

田面のほとりに背ぐくまって坐りこみ、実を結びはじめた稻を眺めていた金訓長キムツンジャン（訓長は漢文私塾の教師）が口にくわえていた長いキセルを手にもって立ち上がり、挨拶代わりに訊ねた。

「はあ……いささか所用が」

いい淀むように曖昧に答え、いまきた道——花開ハナゲのほうをちらっと振り向いてから、文医員は乗ってきた驢馬を止めさせた。そして、驢馬の背からひらりと降りるとひと足先に崔参判邸へ行って待つよう従者に命じてから、向き直って田面を眺め渡したが、陽射しが眩しかったのか文医員は半ば眼を閉じるようにした。まるで文医員の白い髭と黒い冠のあはひを、青空と雲とがかすめていくように見えた。

「平年作というところですか」

「はあ、どうやら平年作には」

と答える金訓長はそれこそ早天に慈雨といった面持ちで、凶らずも文医員にでくわしたことで満面に喜色を浮かべていた。

「聞くところによりますと松亨ソンジョン（金訓長の雅号。いまでもその習慣は残っているが一般に知識人は雅号

をもち、それで呼び合うことが多い。先生におかれては、金進士（進士は科擧の小科初試合格者の総称）宅の野良仕事まで引き受けておられる由、まことにご奇特なことですね」

「いやいや、村の若い者たちの助力を乞うておりますゆえ、私めの独力とは申されませんわ」

「いずれにせよ、有難いことですわな」

「わが一族ですからな、当然の勤めではありませんか。お褒めに預かってしかるべきは村の若者たちですわい」

金進士宅のことを話題にしたとたんにいささか不機嫌になりだした金訓長の表情に、文医員はちらりと視線を走らせた。

「いかがです。ちと休息を取られてから参られては」

じきに柔和な表情を取り戻した金訓長が、勧めるような口調で訊ねた。

「では、お言葉に甘えると致しましょうか」

彼らは連れだつて野面を眺めながら歩きだした。二十歳以上も年齢がへだたつていたが見たところは似たり寄つたりで、ドンチヨゴリ（男性用の韓国服の上衣）姿の金訓長は胡麻塩頭にかぶつてゐる宍巾（冠の下にかぶる冠の一種。馬毛で編み網巾の上にかぶつて正式の冠を支える）と、手にした長いキセルが僅かに両班（朝鮮「李」王朝時代の家柄や身分のある階級をいう。東「文」班と西「武」班の総称で日本の士族に相当）であるその身分を現わしているにすぎず、荒仕事に痛めつけられめつきり老けこんでしまつてゐるその様子からすれば、どこの村でもしばしば見かけることのできる老

百姓といったところであった。そうした金訓長とは対照的に、上品に、白鶴を思わせる氣品を備えて齡を取り、そのうえ鬢かみしげとしてゐる文医員は儒者ソウジヤにもまして竹のように真つ直ぐな氣性の持ち主に見えたから、金訓長の風貌はなおのことみすばらしく映るよりほかはなかつた。けれども族譜ジヨクキョ(一族の系図)を生命より大切と心得、身分上の区別ということでは寸毫の讓歩も許さない金訓長であつたが、文医員に対してだけは重ねがさね尊敬の念をもつて接してきたから、中人階級チュウジンケイ(朝鮮王朝時代の兩班階級の次に位置する。もっぱらソウルに住み計理、氣象觀測、詔官、医官など技術的な職務に従事した)出身の文医員が竹のように真つ直ぐな氣性の儒者に見えるからといって、またその逆に、れっきとした兩班である自分が老百姓に見えるからといっていささかも不滿には思つてゐなかつた。

金訓長の家の舍廊サツラン(主人の居間兼客間)に對座した彼らは、金訓長の娘が支度してきた酒を酌み交わしてゐた。といつても元來が酒をたしなまない文医員には、一杯の酒で早くも眼の前が霞んで見えるようであつた。塩に漬けただけという、それこそ塩辛いうえ黒ずんだ早漬けキムチの漬け物をつまんで、文医員は文字通り口汚しをした。

「近ごろ、世の中はいかがが相成つておりますのでしうか」

趙俊九チヨウシユンクがソウルへ歸つてしまつてからというものの時局の動向に関する話に飢えていた金訓長は、氣ぜわしげにこのように切りだした。文医員は金訓長に比して行動半径が大きかつたから、これまでも時折、ソウルで起こつてゐる事件などを話して聞かせることがあつたのだ。

「相も変わらぬ様子でして」

氣乗り薄と見え、ぶつきらぼうに答えた文医員の表情はいつになく昏くらかった。死期の近づいた病人の見立てを済ませて帰る、そんな日の癩の高ぶりのようなものが感じられた。

「なるほど……ふむ」

「……………」

「世も末ですな。世も末」

と慨嘆しながら、金訓長は言葉を継いだ。

「金鴻陸キムホンヌク（旧韓末唯一のロシア語通訳として一八九四年以後、親露派が幅を利かせた時期に活躍し出世した。しかし、一八九八年に親露派が没落するや、私利を凶ったかどで流刑に処せられ、その後万寿聖節——國王誕生日に國王の毒殺を凶った毒茶事件の主謀者として処刑された）による大逆の陰謀が露顕してこの方、俄羅斯オロシヤの勢力は凋落の運命をたどりつつある模様ですが、代わって倭奴オエノム（日本人の蔑称）どもがふたたび鎌首をもたげはじめたというではありませんか。いまや釜山では、聞こえて来るのは木履げの音ばかりといわれており、あまつさえきやつらの国の宰相職とやらを勤めた者（伊藤博文）までが、またぞろ恥知らずにもソウルへやってきおったというでしょうが」

「……………」

「素っ首を刎ねても飽き足らんやからが」

「一介の訳官にすぎぬ金鴻陸の毒茶事件ごとき……」

「……………」

不安と怒りに歪んでいく金訓長の様子をちらっと見てから、文医員はさらに、つづけた。

「近ごろの朝廷にあっては茶飯事にひどいこととして。また、それしきのことでは引き下がる俄羅斯でもありませんまい。それに、日本だけですかな、食べ物匂いを嗅ぎつけた蠅の群れは。追ひ払うからといって早々に退散するはずもありませんまい。朝廷は昨今、さまざまな利権をただも同然の安値で売りにだしておりませんが、まさに投げ売りにでたにひどいありさまじゃやて」

「とは申せ、他の異国と倭国（日本）とは、同日の論ではありませんじゃろう。きやつらは敵でしょうが。不倶戴天の敵にひどいきやつらに、この国への道を開いてやろうというのですかな。そればかりはなりませんまい。そのようなことは、断じてあつてはなりませんのじゃ」

金訓長は怒りに体を震わせていた。こと日本に関する話題となると、彼はとたんに癪を高ぶらせ、ついには体をわななかせるのであつた。

「大同小異ですわい」

「滅相もない。大同小異なはずがありませんようか。中宮殿（中殿媽々ともいい王妃の敬称。ここでは閔妃をさしている）がきやつらのためにあえない最期を遂げられて、何年になりますのじゃ。それだけですかな。こんにち津々浦々で、義兵らはなぜ血を流して戦っておるのですかな」

「目糞が鼻糞を笑ったところで、詮無いですわい。盗人が強盗に早変わりするのはいともたやすいこと。欲に眼がくらめばどのような悪事であろうと、手を染めぬはずがありませんようか」

「これはしたり、小野（文医員の雅号）先生のお言葉とも思えませんな。あたかもかわりのないことのように仰言るとは」

「……………」

「盗人は盗人、強盗は強盗ですわい。相手がなんぴとであろうと、悪事を働いたことに変わりはありませんじゃろう。小国とはいえ社稷が厳存するからには、よしんば戦争はできぬまでも一國の国母を弑逆した敵を、その不倶戴天の敵を、うん、そ、そうだったな、ソウルで高位の官職に身をおいておる両班どもは、性根が腐り切っておるといわれましたな。後押しできないのはやむを得ぬとしても、その敵と手を結び義兵に銃口を突きつけるなどっての外ではありませんか。これほど腹立たしい事実がほかにありませんようか」

まるで為政者が眼の前にいるかのごとく、金訓長は文医員を叱咤しまた歯ぎしりした。

「だから、目糞が鼻糞を笑うことはないと申しておるでしょうが。章魚がですな」

「……………」

「章魚が自分の脚を順ぐりに食らっていき、頭だけを残して墨を吐きだしたからといってその身を守ることになりませんかな。頭だけではどうにもなりませんまい。身動きできぬからには…………」

「上監（上監媽々ともいい、国王の尊称）に失政がおありだと申されますのか」

「上監におかれても立派なことをなされたとは申されませんでしような。とはいえこれは、優れた人物よと自称しておる手合いについて申しておるので。いわば世の識者と称する方たちですわ

識者となるとそれは、まぎれもなく儒者を意味することになる。

「すると小野先生は、開化を正しいと申されますのかな」

「誤りだとは申せませう。道具は用い方一つで人間を殺すこともできれば、人間の手足代わりに役立たせることもできるはずでして。薬もおなじことで、処方一つで良薬にもなれば毒薬にもなりましようが。聖学（聖人の説いた学問、とくに儒教）といえども開化思想に劣らず、誤用されれば痼疾となつて動脈硬化を起こし、病める国となるのは必定でしような」

「そうとは限りませう。砒素は元來が人体に害をなすもの、山參サンサム（深山に自生の朝鮮人參で薬効も高い。ふつうの朝鮮人參は、人參インサムという名が示す通り栽培されたもので、家參カサムともいう）、鹿茸ノギコ（鹿の袋角を乾した漢方の薬材）はもともと益となるものでしょうよ」

「誰がそうでないと申しました。なればこそ病人には医員が、民百姓には為政者がおるのではありませんかな」

「いずれにせよこの国は、開化党によつて台なしにされましたのじゃ。倭人の銃や刀ごときを振りまわし、王宮を踏み荒らして上監を人質に取つたことから国は台なしにされましたのじゃ」

「名分などは、鼻に通せば鼻輪、耳につければ耳飾りといったところでしょう。つまり、まだ乳臭さの脱け切らぬ若い連中が政権を手に入れることを急ぐ余り惹き起こした騒ぎであつて、あれがどうして開化なものですか。開化を洋風化や倭風化のごとく心得ることからして、誤りでしょ